
最強になったゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話

ゆう

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強になったゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話

【Zコード】

Z3362T

【作者名】

ゆう

【あらすじ】

「ゴミクズな男が魔法先生ネギまーの世界で非道の限りを尽くし、酒池肉林生活を楽しみます。

【 注意 】

この作品は、気分転換に欲望全開の駄文を書く目的で作られています。そして『最低』要素が満載です。18禁になるかならないかのギリギリを追求していますので、管理人から警告メッセージが来たら1ヶ月以内に削除および修正をします。

「げふつ、んだよ、」のオリヰ。幸せがなんだとか言つてないでエ
ロ見せろHロをつ

カーテンビニの戸も締め切った真っ暗で悪臭漂う部屋。

その中に居るボクさんは、パリポリとチップ菓子を食べながら、脂
ぎった手でマウスを操作していた。

手垢でベタベタな最新型のノートパソコンに映っているのは、とあ
る一次創作小説の投稿サイト。

友人という名の下僕から「18禁じゃなくとも面白いのがあるよ」と
と勧められて読んでみてみたんだ。

だけど、ボクちゃんには低レベル過ぎるね。

やつぱリストーリーとかテーマ性とか言つて居る下僕の言つ事なん
か聞くんじゃなかつた。

そう思いながらお菓子の袋に手を伸ばすが、隅まで探つても一つま
みしか残つていなかつた。

袋を傾けて、わずかな残りを口に流し込み、右手の指を全部舐める。

菓子が全部切れていたのだ。

「ぐあああ……メンデクセH…………でも仕方ないから口 ソン逝くか
あ…………よつこせひじり」

それは菓子が切れたらゴンベーに行く、いつもの中の習慣。

その最中にたまたま近くで転んだ少女が、とつてにボクちんを掴んだ。

ただそれだけのこと。

どうせすぐには悲鳴をあげて逃げられる。

そう思っていた。

でも、それが……。

ボクちんの運命を、大きく変えることになるのだった。

少女に腕を掴まれた瞬間、ボクちゃんの中に何かが入ってきたんだ。

「ぬあ、ふぐううう——つっつ——！」

物理的な意味じゃなくて、よくわからん感覚的な意味でだが……。

たしかに何かがボクちゃんの中に入ってきたんだ。

「い、いやああああああああああああああ——つっつ——！」

少女の方も顔を青ざめながら叫んでいる。

こいつの方はボクちゃんの姿を見たからなんだろ？

自分でもわかっているが、今はそれどころじゃない。

なぜか無駄な万能感に満ち溢れてきて、違和感が半端無いんだ。

今なら一瞬念じるだけで、この少女を自分の部屋に誘拐できるかと思えるほどに。

念じてみた。

「北九州市在住の女性たちが、おおむね二十歳前後で、

! ! !

「うはつ？」

気がついたら悪臭漂う部屋の中。

本当に、少女を誘拐できていた。

!

つるせこから黙らせようと念じる。

「…………

ジタバタジタバタッ。

部屋の物を投げられまくって、うつとうつして。

動かなによつに念じる。

ピタッ

「…………

「ハ、ハハハハ……」

ありえない。

ボクさんは腰が抜けて、空の菓子袋の上にざサリと座り込んだ。

一体何が起きたといつのか。

悪臭漂う部屋の中には、青ざめて全身が震えている男女が一組居るだけだった。

な、何だかよくわかんないけど、凄い力だ。

何が起きたのか説明して欲しいから、とりあえず田の前で突っ立つている少女に聞いてみる。

「うーうーっつ…」

あ、あれ？

何か言いたそうな田で呻いている。

変な格好で止まつたまま…だ。

「えーおーんーっつ…！」

あ、口も動かせないからまともに喋れないのか。

ボクさんは口だけは開放してやった。

「あ、あたしの力を返してください…」

ううといひので従順になれと念じてみた。

もう一度説明を求む。

「あなたには相手の超常能力を奪う力があつて、私の力が奪われた
んです」

睨みながら教えてくれた。

嫌な感じで面倒臭くなつたので、”ボクちんを心の底から慕う従順
な雌奴隸”になれと念じた。

「（主）主人様が何でもできるようになつて、雌奴隸の私も鼻が高いで
す！」

「な、なんでもか？」

「はい！ 何でもです！」

話を聞いてみると少女はこの世界の神のような存在で、何でもでき
る力を持っていたらしい。

その力で色々な所を弄くつて、似た世界との比較を楽しんでいたそ
うだ。

簡単に言つと、街を作るゲームのでかい版みたいなことをしていたらしい。

だが、少女はそんな奴が何人も居るといつ。

「マジか！？」

「はい。あたしがトップだったので、さすがに今の『ご主人様ほど』の力ではありませんが……」

「放つておくと危険と言つことか……」

「はい。ですから……」

「よし、すぐにソイツらの力を消すぞ」

「さすがご主人様です！」

ついでだから、ボクちゃん以外の超常的なものは全て消しておいた。

すると目の前の少女も消えた。

「…………（ポカーン）」

ボクさんは呆然とするしかなかった。

とつあえず、やつやの少女を復活させて話を聞いてみる。「」。

「あっ、あんっ…………んんう…………ひゅっ」

全く無いと言える少女のあれを弄りながら聞くと、喘ぎながら教えてくれた。

「あっ、たしわああああああ…………もとお…………かみ、ですううんっ…………」

「ふんふん」

「ひゃあああああん」

話が進まない。

でも面白いから弄りながら聞き続けた。

時間はかかったけれど、色々なことがわかつたんだ。

例えば……。

この世界は魔法先生ネギまーなる「ヒミツクとソックリになるよ」に調整されていったこと。

何故過去形なのかといふと、ボクさんが超常的なものを全部消してしまったかららしい。

とりあえず完全な防御とボクさんに都合の良い強制認識を施した後、問題がない程度に復活させておいた。

全部復活させないのは、ボクさんのような強力なレアスキル持ちが他に居たら困るからだ。

だから完全なる世界とか実在の英雄とか麻帆良の学園長とかは全部消したままにしてやつた。

え？

その前にボクさんが施した完全な防御と都合の良い強制認識は何かつて？

防御の方は、殺傷・神秘・精神攻撃の全てを無効にしただけだ。

あの一次創作は気に入らんかったが、能力的には面白かったから参考にしたんだ。

確か『早すぎる転生物語』とか言つてたっけ。

次に、強制認識の方は、ボクちゃんやボクちゃんのした事全てが、ボクちゃんにとつて都合の良い形で受け止められるというものだ。

これは今、ボクちゃんの手の中で悶えている少女のやり方を模倣した。

「も、もうダメッ、あ、ああああ……んえ？」

「…………」

「ふ、ひ、ん、ふ、ふ、ふ、」

とりあえずボクちゃんの許可が無いと不完全燃焼になるよつて念じておいた。

わかつたことは他にもある。

「あう……んう……ひゃあつー……クツ……くうん……」

とつあえず手を違つ所にも移動させながら、話を聞き続ける。

魔法世界について。

人造異界であり、崩壊が予想されている。

で、ちょうど墓守人の宮殿に黄昏の姫巫女が繋がれていって……あれ?

何か船が集結してゐるけど、何があつたんだろう。

念じてみると事情を知ることができた。

最終決戦の直前になつて、英雄と完全なる世界の両方が消えてしまつたらしい。

ライフメイカーも儀式も魔法無効化も消えたらしい。

「ああつ、くうん……んあああ、あうう……」

英雄は自らを犠牲にして敵を打ち破り、世界に平和が訪れたのでした。

めでたしめでたし。

つてな感じかな。

原作ブレイクも甚だしいが、これで良かつたのだらう。

「も、もうおねがい……いかせんあああああ……くうん……」

「仕方ないなあ……」

「ほ、ほんと、でしゅ、か……？」

「うそうそ

「あ、あつあと……」ひびき声

「一時間後にな

「しょ、しょんなあああああああ——」

その10分後

本気で泣き出したのを見て望みを叶えてあげたボクちゃんは、とても優しいと思います。

この神を召^め乗る少女も、嬉し涙を流しながらお礼を繰り返していたからね。

その後本当に嬉しそうだったから、それが末永く続くよしに念じてあげたんです。

そうしたら、あまりの幸せに殺してと頼まれたので、そのまま成仏させたあげました。

雌奴隸の言つ事を聞いてあげるなんて、本当にボクさんは優しいよね。

それはもう神様くらいに。

ところがで、ボクさんは新たな獲物を見つけに旅立つのでした、まへ。

巨乳化推進計画

新たな獲物…。

「どうせ」「//」シクに似せている世界なら、その「//」シクのヒロイン達を獲物にしたい。

「でも3-Aの女の子たちって、まだ誰も生まれてないんだよなあ…」

そう。

今は原作開始の20年前。

あの可愛い娘ちゃん達が生まれるのは6年後のことだった。

ボクさんはパリポリと音を立てながら誰を獲物にするか考える。

「やっぱり初めては優しい巨乳ちゃんに限るよなあ…」

そして、その娘だけは変わらずに末永くラブライチャイチャして
いたい。

そんな願望を持っていた。

「千鶴ちゃんは無理だから、源しづなつて娘で我慢してやるか…」

ヒロインではないが、あの娘もボクさんに相応しい優しい巨乳ちゅやんだったはずである。

さつそくボクちんは、しづなちゃんの居場所に向かった。

念じるだけだから楽ちんだ。

。

しかし、まだ中学1年生である彼女の胸は、原作のように大きくなつていなかつた。

大きくなつていないといつか…。

「ぺったんこじゅん」

ボクさんは落胆する。

調べてみると、1年後あたりから急に膨らみ始めるように“設定”されていた。

おそらくボクさんが成仏させた少女の仕業なんだろう。

「ふつはあ…」

盛大に溜め息をつく。

他に原作の登場人物で優しい娘は今居ないし…。

魔法世界の幻を初めてにするのは論外だし…。

しづなちゃんの胸が大きくなるのを待つてなんかいられない。

かといって、念じていきなり大きくするのも嫌だ。

しづなちゃんにとつて、自分の胸が”ボクさんに『えられた偽物”になつちまつ。

道具を使つてゐるつもりで居られたら興ざめだ。

心を弄れば解決できるが、その分だけ興が冷めていくからなるべく

使いたくないし…。

はあ…仕方ない。

「ボクちんが少しだけ手助けしてやるか

こつしてボクちんのじずなけやん曰乳化推進計画が始まったのだつた。

出ででての演出

まずは出会わなければ何も始まらない。

ボクさんはじゅなちゃんの事を知っているが、じゅなちゃんはボクちゃんの事を知らないのだ。

第一印象は大切だから、ちゃんと準備しないとな。

とこつわけで、まずは少し動くだけでも疲れるこの体を改造することにした。

いや、改造と言つても単純に痩せただけである。

「！」これがボクちゃんか！？

それだけで見た目が劇的に変わっていた。

スラリとした肉体。

引き締まつた顔。

ダボダボの服。

「.....」

ふ、服は今の体形に合わせて、もう一度鏡を見る。

そこにはボクちんの知らないイケメンが居た。

いやボクちんの面影は残っているから、本当に痩せただけなのか。

そう思つて、ボクちんはこの体形を維持するように念じた。

「つ、次は出会いなんだな」

今、しづなちやんは今、友達2人と海水浴に来ている。

全員美少女で、その中の1人は結構乳が大きい。

とりあえずキープ。

見ていると、3人が揃つて海の奥の方に移動していた。

それを見た瞬間、ボクちんはひらめく。

偶然を裝つて近づいて、まずは巨乳の娘が足を止めるように念じたんだ。

「……ツ」

「恵奈ちゃんっ！」

もつ一人の娘がとつたに助けるも、しづなちゃんは動けない。

とつたの出来事には弱かつたのか？

それならと予定を変更して、助けに入つた娘がクラゲに刺されるようになじる。

今回刺したのは毒をもっていないクラゲだが…。

「んふおあ」

娘は驚いた拍子に海水を飲んでしまい、一緒に溺れてしまつていた。

「…ツ 恵奈さん！ 瑞希さん！」

しづなちゃんが叫んで動き出すも、時既に遅く…。

ボクちんが先に潜つていて、2人を救出していた。

潜ろうとしていたしづなちゃんの前に姿を見せ、人気の無い近くの砂浜へ。

心臓マッサージ（笑）と人口呼吸（笑）をしたら田を覚ましたわけだ。

え？

(笑) は何かつて?

それは言わないお約束つてものでしょ。

ちなみに”ボクちんに都合の良い強制認識”は健在で、しづなちゃんは尊敬の眼差しでボクちんを見つめている。

そして顔を染めながら、ボクちんの顔……いや、唇をじっと見つめていた。

ぐへへ、狙い通り。

その後、ボクちんは2人が目覚めたのを確認して、その場を去った。

そして麻帆良で再会。

喫茶店でお喋りしたんだけど、3人とも顔が赤くて緊張していた。

何かお見合いみたいな空氣で、連絡先も交換したね。

だから別れてすぐに3人からメールが来たのは言ひまでもない。

ボクちんはニヤリと笑みを浮かべる。

出会いの演出、大成功なんだな。

今日はしづなちやんと2人で麻帆良中央公園に。

赤く染まる並木道を歩きながら、お喋りに興じていた。

「誰か付き合っている方はいるのかしら？」

「今は居ないよ。ただハーレム作るつもりだから、それに納得してくれる人じゃないとね」

雌奴隸は成仏（笑）しちゃったし。

まあ、復活させようと思えばいつでもできるんだけど。

「…………」

しづなちやんは押し黙って、苦しそうな顔で何かを考えている。

まあ、現代を生きる日本人に、そういう受け入れられるものじゃないからな。

その点はどうくつ考へてもひとつとして、待つてる間のボクちゃんはウーマンウォッチングだ。

あ、あのランニング美女のオッパイすゞく揺れてる。

とりあえずキープだ。

こんな感じで、麻帆良だけで既に300人はキープしている。

キープしている女の子は、ボクちゃん以外の誰も好きにならなくなるが、代わりに襲われることもなくなるんだ。

で、ボクさんはいつでも彼女らの様子を見ることができる。

トイレ中でもお風呂中でも就寝中でも、見られたくない何かをやっている時でも、いつでもだ。

もちろんしづなちゃんもキープ対象の1人だった。

「……」

「ん？」

気がつくと、しづなちゃんはボクちゃんが見ていた美女と自分の胸を交互に見ていた。

「……胸の大きな女性が好きなのかしら？」

「もちろん」

即答した瞬間、目に涙が溜まった。

ボクちゃんは励ますために、いついつてあげる。

「しづなちゃんのもこれから絶対に大きくなるよ」

「ど、どうしてそんなこと言えるのかしら？」

「だつてしづなちゃん努力家だし」

「ーー？」

じつと見つめてやると、暗かった顔が真っ赤に染まる。

これでしづなちゃんはバストアップのために頑張り始めるだら。

既にしづなちゃんの胸は、努力に応じて大きくなるよといふことをじうわ
ている。

ボクちゃんの予言は絶対に当たるんだ。

。

別れ際、しづなちゃんは寂しそうな顔をする。

でもボクちんは気にせずさつと去った。

そして直後にしづなちゃんの心を読んでみると……。

(このままだと彼のハーレムの一人になつても構つてもらえないくなりそう。つうん、ハーレムの一人にだつて入れてくれないかもしないわ。なんとしてもバストアップしなくては……)

ハーレム要員になれないことを心配し、巨乳化の決意を固めていた。

もはやハーレムそのものを嫌がる発想は無い。

ぐふふつ、狙い通り。

ボクちん笑いが止まらなかつた。

しづなちやん頑張る

ボクちゃんとしづなちやんは、麻帆良中央公園の時以外にも様々なことをしている。

そしてボクちゃんは、そのたびに様々なことを念じていた。

内容は大したものじゃないけどね。

ボクちゃんの唇が気になるとか、ボクちゃんとイチャイチャする夢を見るとか、ボクちゃんに会いつと体の一部が少し疼くとか。

主にしづなちやんの反応を楽しむためだつたんだけど、これがボクちゃんへの恋心を盤石なものにしていったのである。

もちろん麻帆良中央公園の後にも様々なことをしているが、今日の本題は休日の話じゃない。

中学一年生のしづなちやんがバストップに頑張る日常の話である。

しづなちやんは朝起きると、長い髪を軽く整えるなり、なぜかお祈りをするみたいに手を合わせる。

何をしてくるのか、もしや何かの宗教にはまつちやったのかと思つた。

だがそれは杞憂だったみたいで、しづなちやんは10秒力を入れて

少し休憩してを繰り返していた。

肘を張つたまま合わせた手のひらに、両側からである。

最近テレビでやっていたバストアップ体操だった。

その後、四つんばいになつて膝を付けたままお尻を後ろに引く。

両手を伸ばして腰を高く突き出していた。

その後、昨日のうちに作つておいたらしい食べ物を冷蔵庫から出して朝食。

メニューはいかにも健康に良さそうだけど、それだけだ。

それよりもしづなちゃんの手元にある飲み物の方が目立つていた。

豆乳である。

「しづなさん今豆乳?」

「その通りよ」

「あー、大好きな人が巨乳好きって言ってたっけ?」

「ええ。友達の命を救つてくれた、とても勇敢で格好良い人なのよ

「あー、はいはい。海のことでしょう? 3人合わせてもう10回以上聞いてるわよ…」

そして朝食後学校に行き、放課後すぐには帰宅。

そして……。

「ぬまつ

上着もブラも全部取つて、胸をもんでいた。

よもやアレかと思ひきや、しづなぢやんの田は真剣そのものだ。

ん?

手の動きに一定の法則がある?

「こり、にい、さんつ」

10回くらい繰り返したら動きが変わったけれど、それも一定の手順を繰り返しているだけだった。

これもバストアップ体操なのか…。

中にはツボを押しているみたいなものもあつたけど、それもバストアップが目的だと思う。

その後、部活から帰ってきた友人と夕食でも豆乳。

ボクさんはしづなちゃんの涙ぐましい努力に感動した。

あれほど努力なら、近いうちに結果が出るだろ。

ぐふふつ、予想以上だ。

ボクさんの童貞卒業も、そう遠くないかも知れない。

その後、しづなちゃんが寝るまでの一部始終を見て、期待に体の一部をふるわせるのだった。

告白、やして…。

ある日の放課後。

ボクさんはしづなちやんと人気の少ない公園で待ち合わせしていた。

悠々と歩いて公園に入るボクちゃんを、しづなちやんが待つている。

そして2人の距離が近づいた所で、しづなちやんは思い切って言葉を発した。

「わ、私、あなた好みの女になれるように、頑張ってきて、その…」

「うんうん」

「バ、バストを1カップ大きくできたんです」

ボクさんは驚いた。

あれからまだ1ヶ月も経っていないのに、もう1カップ。

長さにして2・5cmだ。

本当にしづなちやんが頑張ってきたことがわかる結果だった。

「そ、それで、もっと胸を大きくするには、好きな人に揉んでもら

「うのが良じよひですかから……」

「……………」

そこでしづなちゃんは一呼吸起き、大きく息を吸い込んで告白の言葉を発した。

「え、気が向いた時でいいの。胸をも、揉んでもうって良いかしら？」

「喜んで！」

「ひあつ！ あんつ、あつ……くふつ……うんうう……」

即答の瞬間、既にお願いを叶えてあげていた。

一瞬で後ろに回り、両脇の下から手を入れて弄くりまわす。

人生初の告白が”好きな人だから胸を揉んでほしい”だなんて嬉しそぎる！

そんなボクちんの気持ちが溢れ出た結果だった。

。 。

それでも今日は触るだけに留めた。

それに、ボクちんのハーレムに入りたいといつしづなひやんの希望も、今はまだ却下した。

初めては優しい田乳ちやん。

そう決めてたからね。

まだまだ△カップのじずなひやんには頑張つてもらわないと。

そう思い、心を鬼にするボクちんだつた、まる。

努力実る。そして…

「しづなちゃん」

モニッ

「アンシ、おはよう、了起来るやん！」

あの昨日の日から、ボクさんがしづなちゃんの胸を揉むのは挨拶代わりになっていた。

おはよしづを忘れても胸を揉むのは忘れない。

それがボクちんクオリティ。

感度は少しすつしか上がっていないが、半年も続いているんだ。

もづボクちんが感じる必要が無いほど敏感になっていた。

そして…。

モニッ、モニッ。

ふよん、ふよん。

「あつ、あつ、ふあ、アンツ」

そつ。

胸が大きくなっているんだ。

しかも、95・6cmのGカップ。

もはやAAサイズでぺったんこの面影は欠片も無かった。

ハーレム入りを許してあげた時は、あまりの嬉しさに泣き出しちゃつたんだっけ。

その後も乳の成長は止まらない。

つまり、しづなちゃんは毎日の努力を続けていっているということだ。

だから、ボクちゃんは違う所も弄つてあげる。

「うひゃんつ、そ、そこはあ……っ」「

「うん、だからボクちゃんの部屋に行こつか」

「！？ そ、それって……」「

「そつ。頑張つたご褒美」「

あると、しづなちやんはあまりの嬉しさにまた泣き出しちゃったんだ。

まだまだ中学1年生で、あの努力を毎日続けた結果だからね。

原作とは違つイメージっぽいけど、これはこれでアリだと思つ。

男冥利にも尽きるしね。

一生に一度の卒業として、これ以上のものはなこと思つ。

。

おかげで何の問題もなく卒業を迎えるわけだ。

「クッ……もう良こよ。次は……ね?」

「えいかわるひ、ぱはつ、はあ、はー……」

。。。

セヒド何があったのかは想像にお任せするがどね。

無事に卒業できたし、しづなちゃんは凄く健気だったし、とにかく達成感が半端無い。

そして隣に温もりを……特にわき腹辺りに柔らかい弾力を感じながら、ボクさんは意識を手放したんだ。

巨乳化推進計画 + 、完了！

あれから半年。

しづなちゃんの努力とボクちゃんの”挨拶”の結果は、留まることを知らなかつた。

具体的に言ひうと、しづなちゃんの胸は1ヶ月に1カップ（2・5cm）以上のペースで膨らみ続けたんだ。

おかげでしづなちゃんは、113・2cmのNカップという原作を遥かに越える魔乳を手に入れてしまったのである。

だから……。

「え、手術？ なんで？」

「んつ、巨乳症といふあつ、病気みたいいいんつ、なのよお

「げつ」

しまつた。

まさか病気認定されるとは思わなかつた。

ボクちん大失敗である。

と、そんな展開になってしまった。

.....。

だけど、それで手をこまねくよつたボクちゃんではない。

当然ちやんヒフォロードカップを維持せぬ。

その第一歩として…。

「大丈夫。それ以上大きくならなければ、問題ないよ」

「コツ」と念じた。

「~~~~~」

「もう大きくなっている？」

「（「クツ」「クツ」）」

「ちなみに揉むと大きくなるのは迷信だから、これからも挨拶は続けようね？」

「コツ

「～～～～～（コクコクッ コクコクッ）……」

しづなちゃんは全身をピクピクさせながら、首だけで肯いていた。
しづなちゃんの胸は”これ以上大きくならない”し、それならば”
問題にはならない”だから大丈夫だろう。

まあ、両方ともボクちんが念じたからなんだけれどね。

「はあ……はあ……んあ……はふう……」

ちなみに、これ程の大きさになると乳が垂れて重くなるのが普通で
ある。

その結果、肩が凝つたり背中が曲がったりするのが通例なのだが……。

ボクちんとの本契約による永続的な魔力供給が、それらを食べ止め
ていた。

ボクちん魔力の影響で、重さはそのままだが垂れていない。

それどころか、先端が自然に上を向くほどひの張りがある。

……その代わり副作用の快感も永続だけど（笑）

しかもボクちんの魔力は無限かつ特別製だからね。

実は今も供給しているから、ボクちんのコリッとする魔力操作だけで…。

「～～～～～つっつ（ガクガクガクガクッ）――――」

”まだ一度も触れていない”のに、こうなっちゃうわけだ。

え？

もしかしてボクちんが直接揉んでいるとしても思つてた？

ないない。

だってボクちん、今魔法世界に居るんだよ？

しづなちゃんは現実世界の麻帆良のまま。

触れるわけ……あるけど、そつするくらいなら召喚しているからね。

今は魔法世界と麻帆良の超遠距離で、映像込みの念話と魔力供給＆操作が上手くできるか実験しているわけだ。

結果は言わなくてもわかるよね。

だってこのコリッが出来るくらいなのだから。

「~~~~~つつつ（ガクガクガクガクツ）――!――」

しづなちやんの巨乳化推進計画が始まつて一年。

計画は順調に進み、確実に巨乳以上。

そして、ボクちんとラブラブ。

でもしづなちやんの全ては、ボクちんが一方的に掌握しているんだ。

本人はもちろんのこと、友達や家族もね。

しづなちやんの母や姉と食べる”ドンブリ”は、とても美味しいゅうじゅいました。

もちろん、友達3人で一緒に”遊ぶ”のも楽しかつたです。

なーんて、敬語で言つてみちゃつたりして。

避妊はしていないから、誰か妊娠しているかもね。

でも誰が妊娠しても娘しか生まれないし、ボクちんが育てる必要もない。

そりに将来美女になるのが約束されていて、全部ボクちんのもの。

常識までも捻じ曲げる、それがボクちんクオリティ。

楽しみだなあ、ぐへへ。

こうして、しづなちやんの乳化推進計画 + は、大成功のうちに幕を閉じましたとさ、まる。

巨乳化推進計画、その裏で…。

時は1年前にさかのぼる。

ボクちんがしづなちゃんに出会った頃、英雄と完全なる世界が消えた魔法世界では、各国間で和平条約が結ばれていた。

過去の事は水に流して仲良くしましょーと。

しかし2カ月後。

メガロメセンブリアはその舌の根が乾かないうちにオステイアを連合から除名。

そして侵攻。

完全なる世界のリーダーである父殺しアリカの討伐とこいつを田で、黄昏の姫巫女を失ったオステイアを奪おうとしていた。

この所業に猛反発したのがヘラス帝国である。

オステイアの元首アリカは前回の戦争の経験を通じて、帝国の第3王女テルドラと親密な関係になっていた。

のみならず、国としても仲良くなってきた矢先の出来事だったのだ。

ヘラス帝国はオステイアの擁護とメガロメセンブリアへの非難声明を発表。

こうしてたった2ヶ月の平和は終わりを告げ、魔法世界は再び戦争時代に突入した。

。。。

グフフッ、上手くいった上手くいった。

現在、ボクさんは魔法世界に分身を大量に送り込み、裏工作に励んでいる。

2ヶ月の間に各国の首脳陣を裏で掌握し、再び戦争を始められた。

両国は勝つたり負けたりを繰り返して、国力をいたずらに疲弊していく。

が、その間にも両国は次々と資金源を手に入れているため、お金だけは死きない。

その結果、兵士と傭兵だけが次々に居なくなつていき、両国は徵兵を決断した。

対象は成人男性。

しかしそれでも直に足らなくなり、学徒動員で男子学生も徴兵される。

そして5歳以上の男子が全て居なくなり、女性兵士の投入が決まる頃を見計らつて……。

ボクちんが裏で手を結ばせていた世界中の女性たちが、一斉に動き出す。

『男が権力を握ると口クな事にならないのは、歴史と今が証明している。今こそ男どもを権力の座から排除し、私たち女性による平和を実現しよう』

その旗印の下、全ての国の女性たちが一斉に立ち上がったのである。

そう。

”全ての国”の女性たちなのだ。

実は戦争に参加していなかつたアリアドナーでも首脳陣の腐敗が問題となつていた。

そのため戦乙女騎士団を始めとするアリアドナー 国内の女性までもが立ち上がり、文字通り『世界女性蜂起』が実現したのである。

もちろん世の権力者と男性たちは反発し、それらはボクちんの加護を得た女性たちに排除されていく。

ただ、あまりにも戦力比が偏り過ぎていたので、姿を変えたボクちゃんの分身も権力者側勢力として参戦。

おかげで女性たちの蜂起に賛同した数少ない男性も、ボクちんの加護が与えられていらないブス女と共に、戦いの最前線で散つていった。

もちろん5歳以下の男の子も、”偶然”死んでいった。

そして頃合を見計らつてボクちんの分身を消して、女性側が大勝利。

魔法世界は蜂起した女性たちの手で統一され、彼女らを裏で束ねたボクちんは英雄に祭り上げられたのである。

。

グフフツ、もうボクちんが何をしていたのかわかつていいるよな。

そう。

ボクさんは魔法世界16億人の中から、男と「アスラ」をしていたのだ。

その結果、もう魔法世界にはボクちゃんと1億人の美女・美少女・美女しかいない。

現実世界との道を繋ぐゲートも“なぜか”機能しないから、男やアスラが流入してくることもない。

それでも問題にならないのは、ボクさんが大量に分身できるからだ。

正確には”ボクさんに都合の良い強制認識”の効果で問題にならないんだけどね。w

一連の作業が完了したのは、奇しくもしづなちゃん「巨乳化推進計画」が終わったのと同じ頃だった。

こうして巨乳化推進計画の裏で、魔法世界間引き作戦が大成功のうちに幕を閉じていたのである。

そして……。

ボクさんの本体が魔法世界に到着し、1億人との蜜月が始まる。

ボクちん皇帝の戴冠式、その1

外からは見ることのできないマジックミラーの窓。

その先にある大きな広場には、1千万人もの美女・美少女・美幼女がひしめいていた。

彼女たちは一様にソワソワしていて、今か今かと時を待っている。上空には全国放送のためのカメラを積んだ、小型飛行船が浮遊していた。

「じ主様、そろそろお時間です」

「うむ、じ苦勞」

「あんつ」

お礼に軽く撫でてあげてから、タキシードのネクタイを締める。

そしてメイド姿の彼女に先導され、1千万人の美女・美少女・美幼女の下に歩いていった。

そして…。

「これより、新皇帝陛下の戴冠式を執り行います。我らが英雄、ご

主人様のお、おなああ――りい――――――――――

垂れ幕が一斉に外され、上座側から会場への階段を下りる。

すると大歓声が響いてきた。

「きやああああ――――――――――――――――――
あ――――――――――――――――――――――――――」

「いじ向いてええ――――――――――――――――

「かつこいいい――――――――――――――

ボクさんは手を振つてあげる。

するとその方向にいる女の子たちが喜び合つのを見て取れた。

そういうしてこううちに中央の大舞台に到着。

そこには、あの世界女性蜂起における各地のリーダーが、ドレス姿で待っていた。

そして戴冠式が始まる。

ボクちん皇帝の戴冠式、その2

戴冠式は厳かな雰囲気のまま、つつがなく進行していた。

とはいって、「こ」はボクちんの魔法世界。

厳かな雰囲気ながらも、ボクちんの胸と何かをふるわせる時が何度もあった。

例えば国民全員が復唱する宣誓の言葉。

「我々、魔法世界に住む全ての国民は 」

「我々、魔法世界に住む全ての国民は 」

「ご主人様の妻として、駒として、雌奴隸として 」

「ご主人様の妻として、駒として、雌奴隸として 」

「」

「相應しくあるために常に自分を磨き 」

「相應しくあるために常に自分を磨き 」

「相應しくあるために常に自分を磨き 」

vv 生涯の全てをかけて頑張り続けることを誓います！ vv

「 「 「 「 生涯の全てをかけて頑張り続けることを誓います！」

「 「 「 「

これを皆がみんな、心を込めて本気で頑張ってくれているのだから、たまらない。

生中継のタイムラグのため、少し遅れて街の方からも同じ言葉が聞こえてきている。

そして遙か遠い地を念じて覗くと、やじろべえの3歳の女の子さえもが同じように復唱していた。

こんな感じでボクちゃんには堪らない話もあく、理性を抑えるのが大変だった。

なにせ各地のリーダーによるお話を、皆がみんな、ボクちゃんの分身との馴れ初めを嬉しそうに語るんだ。

もちろん馴れ初めにはボクちゃんクオリティのセクハラが多分に含まれている。

だけど聞いている皆が揃いも揃つて真剣な顔で、かつ羨ましそうにしているんだ。

これも彼女達に『えた”加護”のおかげだが、本当に理性を抑える

のが大変だった。

そんなこんなで戴冠式のプログラムはつつがなく進んでいき、もう儀式の終わりも間近。

戴冠も存在しない前皇帝の代役がボクちゃんの頭に冠を載せて終了。
だが本当に大変なのはここからだったんだ。

ボクちん皇帝の戴冠式、その3

皇帝陛下のお言葉。

それは全ての国民が見ている中で、彼女らに伝えるメッセージである。

だからボクちんも、ちゃんと考えて作ってきましたんだ。

「ボクちんの妻であり、駒であり、雌奴隸でもある君たちよ。普通の男なら1人で1億人も相手するなんて無理だと思つ。だけど、ボクちんは違うよ。分身を使つナビ、全員が女の子を妊娠できるように頑張つてあげる。」

そつ宣言した瞬間、世界中が歓声に沸いた。

まあ、さすがにあの3歳の女の子は頭にクエスチョンマークを浮かべてたけどね。

近くでちょっとオマセな5歳の女の子が感動していた。

「まずは100万人作るつもりだから、分身1つが君たち100人を相手にすることになる。奪い合わないで、みんな仲良く楽しもうねー！」

そう言つた瞬間にどよめいて、さつそく友人と一緒のグループにな
ろうと話す声がよく聞こえた。

「あとボクさんは直接政治に関わるつもりはないよ。男が権力を握ると口クな事にならないのは、歴史と今が証明しているからね。みんなで協力して、ボクさんに相応しい国を作つていつて欲しい」

そう締めくくると、世界中から大きな拍手が聞こえてきた。

”都合の良い強制認識” サマサマだ。

そして戴冠式はボクちゃんも知らない最後のプログラムに移る。

ボクちん皇帝の戴冠式、その4

舞台の上、ボクちんの前に各地のリーダー達が横一列に並ぶ。

そしてボクちんの斜め後ろにはわざわざカメラが回りこんでおり、リーダー達を順番に映していた。

ドレス姿のリーダー達は、皆一様に顔を赤く染めており、中には全身を震わせてくる者までいた。

司会の娘も列に加わっている。

一体何をするのだろ？

「さて、私たちは」主人様の妻として、駒として、雌奴隸として久くし続けることを誓いましたが、誓うだけではいけません」

え…もしかして…。

「そこで各地のリーダーであると司会である私たちが、ぜひとも国民の代表として最初に実践したい。そういうことで最後のプログラムが決まりました」

と…こういふことは…。

「『』主様には全国生放送の中で、私たちにお好きな命令をして頂きたいと思います。その命令が耐え難いものであればあるほど、私たちにとつては自分の覚悟を示すチャンスになります。」

これはまたかの...。

「ですから、なるべく私たちにとって耐え難い」とお命じ下さい」

公認羞恥プレイ来たあああああ―――つつ――!

通りでみんな揃つて真っ赤になつてゐるはずである。

しかも

「ご主人様つ！ 私たちも！ 私たちにもお命じ下さああ———
いつ——！」

「私も覚悟を見せたいです！」

水の運搬の周期は、おおむね毎年1回である。

ぐふつ、ぐふふつ、この娘たち最高過ぎる。

でも観衆の皆はまた今度と断つて、今は舞台上の美女たちに集中し

た。

全員に同じ格好をさせて並べたり、1人ずつカメラで舐めるように撮影させたりと、色々な事を命じた。

とりわけ多く命令したのが、全身を震わせていた少女。

ついつい虚めたくなつて、やりすぎて、仕舞いには泣き出しちゃつたんだけど……。

それまでの努力を褒め称えてキスしてあげたら、すげく幸せそうな顔になつたんだ。

それで、もひるんの場で全員と本契約。

もひるんやり方はしづなちゃんと同じで、一番簡単な方法”だ。

具体的には言わないけど、全国生放送でも構わずやるのがボクちんクオリティ。

おかげで最初の厳かな雰囲気は欠片もなくて、今や世界中がある意味ヤバイ雰囲気に包まれていた。

しかも皆がみんな、不完全燃焼。

友達と助け合えば多少の効果はあるものの、それでも不完全燃焼なのは変わらない。

解決できるのはボクちんだけなのだ。

そんなこんなで、最後は取り繕つたように司会が終わりを告げた。

「」、これにて、皇帝陛下の戴冠式を終了いたします

外はもう、真っ暗だつた。

敗戦者の末路

ボクさんは魔法世界間引き作戦で男とブス女を始末したわけだが、全ての女性が世界女性蜂起に参加したわけではない。

中には最後まで権力者側に居たり、途中で権力者側に寝返った女性もいたのである。

その中でも有名なのが、オスティア女王のアリカと帝国第三王女のテオドラだ。

また、セラスという女がアリアドネーで戦乙女騎士団を裏切って情報流していたことも見逃せない。

このように、魔法世界の原作キャラたちは、揃いも揃つて権力者側に付いていたのである。

さて、原作キャラのように権力者側にいた美女・美少女たちは、ある部屋に並べられて全身を機械に拘束されていた。

両手両足どころか両目も無く、力も奪われた状態でだ。

穴という穴全てにチューブが繋がれており、その中を色々なものが移動していた。

チューブには様々な大きさのものがあり、中には蠢いたり振動したりしているチューブもある。

そして……。

「ン――――ツツツ―――！ フ――――ツツツ―――！」

その中の1人、1ヶ所だけチューブを外されていた穴。

そこから出てきた赤ん坊を、機械が受け止めた。

機械はへその緒を処理し、赤ん坊だけを隣の部屋に移動させる。

終わつたときには、再び全ての穴にチューブが繋がっていた。

「ウ――ツ――！ ア――ウ――ツツツ――！」

チューブに口を塞がれた声は、誰にも届かない。

機械はただ、決められた動作を繰り返すだけだ。

そう。

。 。 。 。 。 。 。

敗戦者の末路は、ボクちんの子供を量産する家畜だったのである。

しかしどんなに泣いても喚いても、助けが来る事はない。

原作キャラにしても、王族2人の騎士はもう居ないし、セラスには元々強い味方が居なかつたからね。

もう産めない身体になるまで、延々と同じ作業が繰り返されるのだ。

そしてまた1人。

1ヶ所だけ、チューブが外された。

ボクちんの朝は早い。

窓から差す朝日の中でも、従者に「コシ」と魔力を送る。

「　　」　～～～～～～～～～～～～

その後、ボクちんの足の間にひまわりの子に声をかける。

「んつ、わつこよ

「さうめぬつ、ぱまつ、まつ！」

「わづ準備できてる？」

「えー？ あつ、はー！ お願いします！」

なぜここに来たのかは聞かない。

分身を使って国民全員を孕ませると宣言したが、それでも本体のボクちんとしたがる子は後を絶たなかつた。

特に初めてだけは貰つてほしこう子が多い。

そこで、処女でありながら妊娠率が高い日の希望者のうち、気に入った子たちを前日に選択。

この子も、ボクちんの周りや外で控えている子たちも、そつして選ばれた1人である。

そんな事を考えながらもする事はしていき、魔方陣を発動させて本^{パク}契約^{ティオ}。

相手を替えて本^{パクティオ}契約。

さらに相手を替えて本^{パクティオ}契約。

それを繰り返す。

例外もあるが、それもただ本^{パクティオ}契約^{ティオ}をしていないというだけである。

例えば……。

朝・昼・夕の食事は、口移しで食べさせてくれている。

机の下にも1人。

…何をしているかは言わないけど。

トイレでは紙を使わないで綺麗にしてくれている。

…ヒルやヒル綺麗にしてこのかせ言わなこナジ。

風呂はタオルを使わないので洗つてくれる。

…何で洗つているかは言わないけど。

と、こんな感じである。

そして夜になつたら、また次の日に呼ぶ希望者を選ぶのだ。

彼らの95%は幻なのに、今はそれも気にならない。

……まあ、優先的に”人間”を選んではいるけどね。

それで次の田も、相手を替えて同じことを繰り返す。

…と、忘れてた。

お休みの挨拶もしないといけないよね。

ボクさんは群がる女の子の感触をそのままに、一瞬で部屋を綺麗にする。

そして従者にコリッと魔力を送った。

「これが皇帝陛下」とボクちんの日常である。

19年間の出来事

あの後、ボクちゃんは魔法世界で酒池肉林生活を楽しみながら、色々なことをしていた。

中でも特に重要なものが2つ。

一つ目は、しづなちゃんとのラブラブイチャイチャである。
でも、思っていたほどHロエロではない。

しづなちゃんは、バストアップに励んだ1年の達成感が凄まじかっ
たらしく、原作では考えられないほど精力的に活動していた。

学業・魔法・夜伽の勉強に、ボランティアへの参加。

新しい部活やサークルの設立に、医科大学の首席卒業。

新しいことに挑戦し、頑張って結果を出し、その達成感からまた新
しいことに挑戦する。

出来すぎなくらいに完璧な彼女は絶大な人気を集めだが、隣にはい
つも恋人 兼 助手のボクちゃんが居る。

……まあ、分身なんだけどね。

でも皆にはわからないし、ボクちゃんとしづなちゃんはラブラブな所
をみんなに見せ付けているからね。

もちろん”挨拶”も今まで通り。

おかげで前かがみになる男が続出していた。

本当にHOROHOROなことができるのには、夜と早朝だけである。

2つ目は、現実世界の掌握。

表と裏。

権力者側と対抗勢力。

その全ての首脳陣を、2年でボクちんの分身に置き換えた。

間引きをしていないし、分身は元の人間を忠実に再現しているから、誰も気がついていないけどね。

その後17年間、生きている男をボクちんの分身に入れ替える作業を継続していくことで、ついに男の駆逐に成功した。

ぐふふつ、これで現実世界30億人の女の子はボクちんのものだ。

それに伴って、ボクちんとの間に男の子も生まれるようにしておいた。

……その男の子もボクちんの分身なんだけどね。

世界征服が完了していることに誰も気付かないまま、今日も世界は

回り続ける。

そして…。

とうとう原作開始の日がやつてくる。

主人公の名前は、ネギ・スプリングフィールド。

ボクちゃんが変身した、架空の少年である。

ネギの修行内容

メルティニア魔法学校を首席で卒業したボクさんは、ネカネと「アーニャ」を連れて学校の出口に向かっていた。

「ネギ、何て書いてあつた？ 私はロンドンで上じこ歸よ

「修行の地はどいつだつたの？」

「今、浮かび上がる」と

魔法学校では、修行内容が卒業証書に浮かび上がる。

それを知つてゐる2人は、ボクさんの両側から卒業証書を覗き込んだ。

内容はやはり、原作どおり

「日本で」

「…………」

「先生をやめると」

直後、悲鳴のような叫び声が……あがらない。

10歳の教師なんて絶対にありえない。

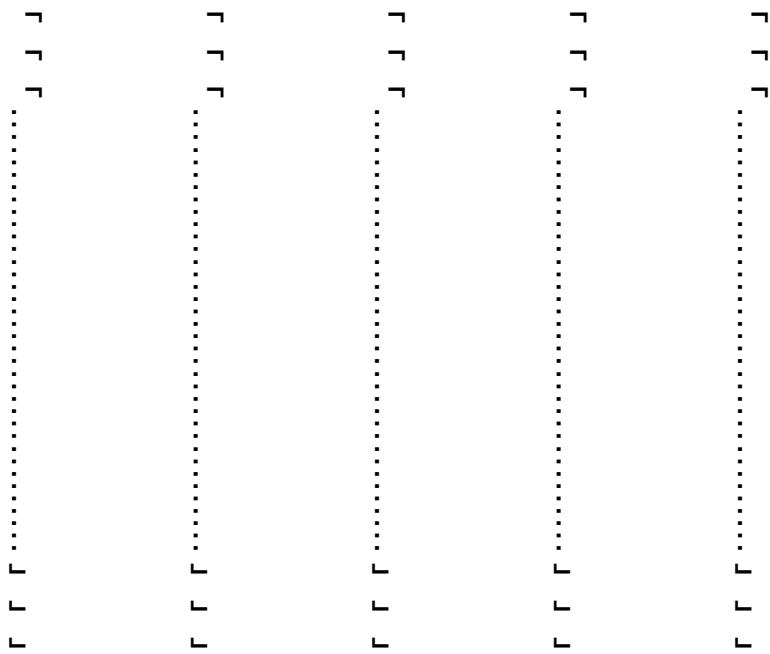
2人ともそう思っているのにも関わらずだ。

なぜなら……。

「そして千人の女性を孕ませてくれる」と

それよりも衝撃的な命令が、後に続いていたからである。

あまりのインパクトに2人は固まつてしまっていた。



しばらくして正気を取り戻した2人は…。

原作を遥かに越える大音量を、学校中に響き渡らせた。

「『』、校長！　”孕ませ”ってビーチーとですかー…？」

「ほひ……”孕ませ”か……」

「何かのマチガイではないのですか！？　10歳で×××なんて無理ですー！」

「そつよー。ネギつたらただでさえ口でスケベで……」

「『』、『』アーニャちゃん！」

「あ、えとえと、ネギとは私とネカネお姉ちゃんがしたんだからー。あと千人なんてダメに決まってるでしょっー。」

「ああひ」

アーニャの失言にネカネが頭を抱える。

もうしてるのがバレたら、×××が無理なんて言えないもんね。

……校長もボクさんの分身だから実はバレているんだけど。

「しかし卒業証書にそう書いてあるのなら決まつたことじや。立派な魔法使いになるためには、頑張つてセツ……もとい、修行していく

るしかないのう

「 「 ああああ … 」 」

「あ、お姉ちゃん！ アーニャ…」

原作とは違つて、ネカネだけでなくアーニャもフワツと倒れた。

何をどうしても修行内容は覆らないから、ちゃんと介抱だけはしてあげた。

方法は言わないけどね。

アーニャは10歳の身で陣痛に耐えながら修行をしないといけないわけだ。

……まあ、それは他の卒業生も同じなんだけど。

それに同じ経験をした先輩が5年分もいるから、参考にすれば良いと思う。

だからアーニャの件は大したことじゃない。

むしろ教師と在校生たちの方が大したことである。

既に半ば女子校と化していたメルティアナ魔法学校の、教師と生徒。

その大半が同時に子供を孕んでいて、一斉にお腹が大きくなつてい

くのだから。

ネ力ネヒアーニヤ、魔法学校。

麻帆良に行つても、ちよくちよく様子を見てみよ。

そう想うボクちゃんだった。

名簿から消えた者たち

「ぶはあ～」

ボクさんは[印]真付きの出席簿を見て溜め息をつく。

それは確かに原作の3・A……いや今は2・Aの少女達のクラスだつた。

でも入れ替わつていて存在しない原作キャラも多く居たのだ。

エヴァンジエリン、ザジ、龍宮、桜咲、長瀬。

この辺の人間じゃない奴らが、まず居ない。

ボクさんは神?の少女から能力を奪つたとき、自分にとつて危険な奴らを真っ先に排除した。

だからエヴァンジエリンは仕方がないと思つたけど、問題はザジと龍宮と桜咲と長瀬。

鷹の子はやはり鷹から生まれるのか、彼女らの親が彼女らを産む前に、消去されてしまつていたのである。

その点は近衛木乃香も同じで、英雄の父親を既に消しているから普通に生まれてこなかつた。

次に未来人、超鈴音。

コイツはそもそもこの世界に来ていない。

これは、先祖のナギが子供を作る前に消されたからだと思う。

だからこの世界に超包子は無いし、絡繳茶々丸も作られていなかつた。

最後に最大の予想外。

それは神楽坂明日菜と古菲^{クーフェイ}が居なかつたことである。

まず神楽坂明日菜こと黄昏の姫巫女は、魔法世界間引き戦争の最中に死んでいた。

力と英雄を失つた関係でメガロメセンブリアの上層部が彼女を虐待しており、どう見ても美人には見えなかつた。

そのためボクちんの加護を得た美女が、他の権力者側のブス女と一緒に引いていたのである。

そして古菲は今も中国に居て、ボクちんの分身の餌食になつてゐる。

元々、強者が集まる噂が全くない麻帆良に留学するわけがなかつたんだ。

来ないとわかつた瞬間、分身に襲わせて余裕で勝利。

全てを奪つてやつたんだ。

まあ、相手は自分より強い男だけと言つていたし、問題ないだろう。

他の男と純愛しようが、そいつもボクちんの分身だしね。

というわけで、結局2・Aに居ない原作キャラが、エヴァ、ザジ、龍宮、桜咲、長瀬、木乃香、超鈴音、茶々丸、神楽坂、古菲。

計10人である。

割合にして3分の1もの女の子が食べられないというのは痛かった。

まあ、どうしても食べなければ他のコミックに似せた世界から召喚しちゃえればいいや。

そう思いながら2・Aの教室の扉を、罠が仕掛けられているのとは反対側から開くのだった。

初めての魔法学、その1

「今日からこの学校で魔法を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです。このクラスの担任もしますので、よろしくお願いします」

これは2・Aの姫にしたボクちんの猫がぶり挨拶だが、何も間違つていない。

なぜならこの世界のネギ先生は、原作とは違つて本当に魔法を教えるからである。

ネギ先生の赴任と同時に全学年に追加されたカリキュラムは、その名も魔法学。

全員が一期生ということで、生徒達は朝礼の時のようにグラウンドに集められる。

そして、午前の授業時間を使って使って授業を行つ。

また、既に魔法を使える生徒と魔法先生は、ネギ先生の補佐をする。

それが魔法学という授業だった。

その実態は、ボクちんの課題を達成させるために急いで用意された環境なんだけどね。

だからボクちんを補佐してくれる魔法先生も、全員が女性なのであ

る。

「それでは、第一回、麻帆良女子中等部魔法学の授業を始めます」

「…………おねがいしまあーすうー…………」

先ほどまで「可愛い！」とボクちゃんを見て目を輝かしていた女子中学生が、一斉に頭を下げる。

そして恒例の自己紹介を終えた後、ボクさんはさつそく授業を始めたことにした。

皆の手には既に初心者用の可愛らしい杖と教科書が行き渡っている。

準備は万端だ

「今日は最初の授業という事で、一番簡単な魔法を使ってみましょ
う。みなさん、教科書の1ページを開きながら杖を持つてください」

生徒たちは初めての魔法ということでソワソワしながらも、真剣な表情でボクちゃんを見ながら準備する。

「杖を振りながら” プラクテ・ビギナル、
武装解除” です」

「あやっ」

実演すると葛葉刀子の真剣は、衣服」と遠くに飛んでいった。

ホームラン

といつわけで刀子先生には”あぶない水着”を着せて、説明を続行しました。

「エクセルマティオ」のよひに武装解除は、相手の獲物を吹き飛ばして自分が攻撃されないようにする呪文です

「そつかあ……」

「掛けたもん勝ちだね」

「なんか面白そつ」

一斉に場がどよめくが、その大半がボクちんに都合が良いものだ。

これはボクちんの強制認識じゃなくて、麻帆良の魔法教師たちが内緒で準備していた認識阻害の効果。

ただ、認識阻害が効いていない魔法使いや長谷川千雨ちゃんにはボクちんの強制認識が働いているみたいだ。

まあ、どうでも良いんだけどね。

それより今は武装解除の説明だ。エクセルマティオ-

「服が使えなくなっちゃつても替えの水着が用意されています。刀子先生に渡した”あぶない水着”の他に”いけない水着”や”きわどい水着”なども用意していますから、安心して隣の人魔法を掛けあげてください」

「…………（「クッ）」

ボクさんは生徒たちが頷いたのを確認して実習を始めさせる。

始まりの合図をした、次の瞬間

「………… プラクテ・ビギナル、エクセルマティオ-武装解除——つづつ——！」

グラウンド中に舞い散るブラウス、スカート、ブラジャー、シヨーツ。

それに次いで杖が飛ぶが、靴と靴下だけはなぜか最後まで残つている不思議W

初心者魔法が”火よ灯れ”じゃない事も含めて、もちろん全てボクちゃんの仕業である。アールデスカット

そして武装解除だけは、訓練無しで誰もが使えるようになっていた
のだった。

初めての魔法学、その2

衣服と杖が空を舞つ魔法学の授業中…

「ネ、ネギせんせえー……き、きわどい水着を、くれませんかー…？」

田が前髪で隠れている女の子が顔を赤く染め、両手で3ヶ所を隠しながらボクちんに話しかけてきた。

あ、この子2・Aの宮崎のどかだ。

左右には頬を染めて1ヶ所だけを両手で隠す綾瀬夕映と、むしろ見せ付けるように堂々している早乙女ハルナがいた。

ポーズこそ違うが3人とも同じ格好である。

ボクさんは緊張を和らげるため、原作のように髪型に注目してあげた。

「はい、きわどい水着。あとお節介かもしれないけど、顔を髪で隠しちゃうなんて勿体ないよ?」

「でしょでしょー!? カわいいと感つでしょー? この子かわいいのこ顔出せなこののよねー!」

夕映ちゃんとハルナちゃんは協力して、両側から前髪をかきあげてのどかちゃんの顔を晒す。

カアアツ

のどかちゃんはさりに顔を赤くして、真っ赤っかになる。

「えつ……あつ……」

顔を真っ赤にしながらも動くに動けない様子を見て、両側の二人がニヤリ。

夕映ちゃんとハルナちゃんは協力して、両側から手首を引っ張つてのどかちゃんの3ヶ所を晒す。

「ひやつ！ ネギせんせえ……見ないでくださいーーい……」

もちろん無視してガン見である。

何気に両手が塞がっている両側の2人もだが。

「あつ……そんな……パル……ゆえゆえ……」

ふしゅ———つ。

そんな擬音が聞こえたかと思ひ、のどかちゃんのまま気を失つてしまつた。

ボクちゃんはしばらべのどかちゃんが眠り続けるよひに念じた。

そして…。

「すみません夕映さん、ハルナさん。もしのどかさんが授業終了まで起きなかつたら、介抱を手伝ってくれませんか？」

「わいわい

「はいです」

最初の3人が決まる。

のどかちゃんは授業が終わつても起きないし、夕映ちゃんとハルナちゃんは、ボクさんの手を借りずに連れて行く発想ができないうに念じられているからだ。

これでよひすべく、卒業課題の達成へ一歩……二歩、三歩を踏み出しだ。

.....。

と思いきや、そうではない。

その後も同じように気絶する子が100人以上も続出したんだ。

2・Aの原作キャラでも、運動部4人組の和泉亜子と演劇部の村上夏美がボクちんの前で氣を失っちゃったしね。

裕奈ちゃん、まき絵ちゃん、千鶴ちゃん、グッジョブです。w

気絶した子の付き添いもあわせると300人にもなってしまったのである。

さすがに300人の女の子を保健室に入れる事はできないので、代わりに体育館へ搬送。

そこに用意された別荘にボクちんと何人かの生徒が先に入る。

他の子は魔法教師達が別荘の外で看病しつつ、時間をずらして入ってもらつたのである。

次の日の朝までだつたから、別荘の外の時間で18時間、中の時間で36日間。

それをフルに使って何をしていたのかは内緒だけどね。

驚く子や抵抗する子もいたけど、最後には皆嬉しそうな顔だったとだけ言つておひ。

魔法先生や魔法生徒のも含めて、手元に300人以上のカードがあるからね。

これで好きなときに召喚したりコリッとしたりできる。

「　　「　　」　　～～～～～　　」　　」　　」

これで、かなり課題達成に近づいたはずだ。

ぐふふ、この方法を考えた魔法教師グッジョブ！

「ひう…んあ…任せてください」

「はあ…はあ…ふふつ、ありがと」

口に出して言つてみたら、刀子先生とシスター・シャークティーがお礼を言つた。

うわ、予想外すぎる。

もはや原作とは別人だと思うボクちんだった。

ボクちゃんの朝は早い。

それは麻帆良に来ても変わらなかつた。

窓から差す朝日が眩しそうに見えたボクちゃんは、従者にコロツと魔力を送る。

「　　」

「　　」

「　　」

これで多くの従者が田覚めるのは、皇帝だった頃から続いている日常だ。

しかし毎日続けていると従者も慣れてくるもので、魔法世界の皆さんは普通に挨拶が返つてくる。

遅れて麻帆良。

ボクちゃんは返礼としてコロツと魔力を送った。

「　　」

「　　」

田の前の従者たちは、全身液体まみれで舌をのけ反らせていた。

ボクちゃんは彼女らをスルーして、女子寮の大浴場に向かつた。

。 。 。

そして大浴場。

「あ、ネギ先生來たつ」

「ネ、ネギせんせー……」

「ネギ先生、もう我慢なりませんわ！ われわれ、しゃがむ！」

「あ、いいんぢゅうーーー！」

「ダメよ、あやか」

クイック、むにひつ。

「さういふたと、やつはひません。ネギ先生を返しなさい。」

グイック、むにひつ。

「ううと何やつてたのよー。私もまわるー。」

グイック、むにひつ。

「何々、バスト勝負？ 胸の大きさなら負けなによー。」

グイック、むにひつ。

今日は「ミミックとソックリな台詞でマッシュマロ地獄だつたが、今の彼女たちは水着を着ていない。

それに全員が顔に集中しているわけじゃないしね。

え？

アレに胸を押し付けてくる子もいるかつて？

当然居るに決まっているじゃないか。

”アレ”が何かは言わないけど、想像はつくと思つ。

とはいって、朝の挨拶で出来上がっている彼女たちがそれだけで終わるはずもなく……。

ボクちゃんはここに居る全員の相手をすることになるのだった。

まあ、全員とは言つても今日の朝風呂担当の娘だけだ。

これも魔法世界の時と同じで、希望者の中からボクちゃんが選んでいるんだよねー。

グフフッ。

朝の教室では、むずむず顔の生徒たちがスッキリ顔の朝風呂担当を羨ましがっていた。

むずむず顔の生徒の中には、頻繁に身を捩じらせる子もいれば、会話しながら机の角を使っている子もいる。

トイレの個室で頑張っているのも、むずむず顔の生徒だった。

キーンローンカーンローン…

チャイムが朝のショートタイム5分前を告げる。

するとトイレから生徒と女性教師が次々に出てきて、おのずの教室に飛び込む。

その顔は一様に赤くて不満気だ。

ボクちゃん以外では不完全燃焼になるように念じてあるからね。

みんな平然を装っているけれど、部屋の中は香水と女の子の匂いが充満している。

ぐふつ、ぐふふつ、ぐふふふふふつ。

微妙な雰囲気のままショートタイムが終わり、魔法学の授業。

ネギ先生ことボクちゃんの日常は、始まつたばかりだ。

ネギ先生の日常2

「一同、礼！」

「…………おねがいしまーす」

「さて、基本的な魔法の授業はこれで最後になります。みんな、教科書の132ページを開いてください」

立つたままでページを開く音がする。

微妙に色っぽい声もある。

「最後は先生が教える唯一の攻撃魔法、魔法の射手です。しかし氷や炎で傷つけるわけには行きませんから、これを使います」

ボクちゃんは杖を振り上げ……。

「魔法の射手セイの一矢」

「ひああああああああ——————」

助手の佐倉愛衣ちゃんに振り下ろした。

愛衣ちゃんは床に崩れ落ちそうになるが、ボクさんが手を引っ掛け
てそれを食い止める。

「んひいいいい——つつつ——！」

どこに引っ掛けたかは内緒だけどね。

とりあえず引っ掛けた手を動かしながら話を続ける。

これから実践するにあたって、手や手に持った道具で自分にも他人
にも触れないようにしてること。

そして時間が経つごとに体の一部が疼くようになること。

セイの矢は自分に射れないで、解決するには誰かにセイの矢を使
つてもらうしかないこと。

セイの矢を受けてしまふと、また体の一部が疼くようになる
こと。

その他、細々とした説明をして…

「さあ、始めて下さい」

「———— プラクテ・ビギナル、魔法の射手セイの一矢 ————」

「

瞬間、桃色の矢と色っぽい声がグラウンド中に飛び交った。

が、しばらくすると1人の生徒が集団の中から抜け出してくる。

2 - A の 長 谷 川 千 雨 ち ゃ ん だ。

「ネ、ネギ先生、お願ひだ……。お願ひだからセイの一矢を私にかけてくれ」

どうやら自分に魔法をかけてくれる友達が居なかつたらしい。

ボクちゃんはニヤリと微笑む。

千雨ちゃんは顔を青ざめる。

「どうしようかな

「お願い…お願いだからネギ先生っ！ 何でもするから、どんなことでもするからっーー！」

「うへ」

「とにかく私を助けてくれええええええええ————————」

その後、最も弱い威力でセイの一矢をかけてやつて、重ね掛けするたびに要求。

千爾ちひちゃんに名前を書かせた強制証文に項目を追加していく、雁字
搦めにしてやつた。

「はあ……はあ……あ、ありがとうございます」主人様。でももう一度、もう一度この雌奴隸にお情けをつけて……

おかげで性格が変わっちゃつた。

やつたのは分身で、場所は寮の千爾ちひちゃんの部屋だけじゃね。本体のボクちゃんは愛衣ちゃんを弄りながら、千爾ちひちゃんのよつよつてくる子への応対をしていく。

同じ2・Aだと、葉加瀬聰美ちゃんも頼つてきたね。

超鈴音が居ないから他の子との繫がりがないのである。

もちろん分身と一緒に個室へ送つておいた。

だが同じく繫がりがないはずの四葉五月ちゃんは、その人柄から主旨的に助けてくれる人が多数。

むじる沢山の矢を受けすぎて物凄いことになっていた。

それはもう、18禁でしか描写できないうらう大変なことに…

… 描写しないにゃどね。

あ、手の中の愛衣ちゃんも同じへりこやべーひとになつてら。

… いれも描写しないにゃどね。

とにかくボクちんは、こんな感じで授業をしていく。

やじてボクちんの口調は、まだまだ続く。

ネギ先生の日常③

昼食も魔法世界の時と同じで、口移しで食べさせて貰つてこな。

「はー、ネギ先生、んー」

「あむ」

ぐづく、ぐづく、じゅる、ぐづく、やけく、やけく、「ぐづく。

「「ふせつ」」

同時に、机の下にいる1人が……

「んつ、んつ、ズズシ、んつ、んつ、んつ、んつ、んつ、んつ、

……何をしているのかは、もちろん言わなきゃだ。

ただ、これも魔法世界の時と同じだけ言つておく。

そして、ボクちんの授業が無い午後には、明日の授業の準備をする
……わけがない。

授業の準備なんて面倒なものは、他の魔法先生たちにお任せである。

それならボクちんが何をやっているのかといつと、他の先生方の代役である。

だが、ボクちんが真面目に代役をこなすわけが無い。

例えば今は2・Aの国語の授業。

ボクちんは全員の体を疼かせて、スーツの下を脱いで教壇の上に座る。

瞬間、全員のもの欲しそうな目が、ボクちんの下半身に集中する。

そしてボクちんの目の前に、生徒の座席と同じ配置で30個の”穴”を出現させた。

「それでは教科書255ページ5行目から読んで貰いましょう。お願いするのは……」

そして穴の上に太い棒状の何かをわざわざして……

穴の1つに先端を固定。

そして思いっきり押し込む！

「んああああああああああ-----」

棒状の何かが黒い穴を通った先には何もなくて、代わりに面崎のどかの悲鳴が響き渡る。

ぐふふつ、何があつたかは想像にお任せするよ。

魔法世界でもそだつたけど、のじかちゃんみたいなウフな女の子ほど虚めたくなるよね。

ボクさんは黒い穴から少しだけ出てこる棒をグリッと動かして、ちゃんと立って読むように促した。

「は、はひ……もひひわへ……ないれふ……」

もちろん直後にスイッチを入れる。

のじかちゃんは再び叫び声をあげて着席してしまうが、その後また立ち上がつて読もうとしてくれる。

本当に、のじかちゃんって健気だよね。

だからボクさんは敬意を表して、棒のレベルを上げていつてあげたんだ。

おかげで朗読は遅々として進まなかつたけど、授業終了まで根気強

く付き合つてあげたんだ。

……のどかちゃんを羨ましそうに見ながら、体を疼かせている
29人を放つておいてね。

のどかちゃんが朗読し終わったのは、授業終了のチャイムが鳴る直
前だった。

と、1Jのよつな感じの授業を何回かして、放課後は女子寮へ。

その後は、寝室で、夕食で、お風呂で、また寝室で…。

魔法世界の時と同じよつな」と、それぞれの担当の生徒たちとする。

全てが終わった後は、そのまま次の日の担当を選んで、一瞬で部屋
を綺麗にする。

最後はおもひりん、お休みの挨拶。

「コシ

「　「　「　「　～～～～～～～～～～」」」

これがネギ先生ことボクちんの日常である。

早くも課題達成。そして……。

あの後。

ボクさんは麻帆良での日常を過ごしながら、新しい生徒と本契約する機会を伺つた。

そして何があるたびに、その状況を利用して本契約。

そんな日々を繰り返したことで、千人という目標を軽々とクリアしてしまつていた。

何せ全校生徒2,331人中の1,000人だ。

魔法世界や魔法学校の経験に比べればチョロイものだつた。

おかげで、3月の終わりには全校生徒2,331人がボクちゃんのものになりそ�である。

予定の2倍にあたる人数。

それでも当初の予定より早く終わりそうだった。

「んちゅる、んつ、んつ、んつ、んつ」

そして毎日が情欲にまみれた生活。

気まぐれに色々な要求をしたり趣向を凝らしてみたりしたもの、それも直に飽きてしまった。

何せ魔法世界で暮らしていた頃とほとんど同じなのだ。

授業に関しても面白いのは、武装解除と契約執行、それに性属性の魔法くらい。

それも修学旅行が終わり、学園祭が始まる頃には全てマスターさせてしまっていた。

もちろん全て実践済み。

原作では学園祭の後は魔法世界編だが、この世界では名前上行き来できないようになっている。

それに行けるとしても、わざわざ行く理由がない。

1億人の美女・美少女・美幼女は、既にボクちんのものだからね。

しかも分身がエロエロな生活を送っていて、気が向いたらすぐに記憶を共有できるんだ。

分身の記憶は実体験として共有できるから、本当に行く必要がないんだよね。

だから学園祭が終わった後は、本当にやることがなくなっていたんだ。

「ふはつ、え？ ネギ先生！？」

ボクさんは今までやつていた事の続きを分身に任せる。

そして女子寮から抜け出して、世界樹の上空に飛び上がった。

。。。

麻帆良の街並み。

それは、しづなちゃんと出会った場所であり、女子中の皆と過ごした場所である。

立ち並ぶ家々には明かりがつき、そこには多くの人々の生活がある。

が、その中の男性全てが、元の人と同じように自立行動をさせてい る分身だ。

目の前の男性が分身だと気付く女性は、一人も居ない。

。 . .

さうして上空、大気圏の中で見下ろす世界の半分。

そこにも明かりがあり、多くの人々の生活がある。

が、その半分が分身だとは誰も気付かない。

それは世界中に生きる30億人の女性全てが同じだ。

だから、日本の裏側に行ってみても何が変わるわけでもない。

ただただ、張りぼての日常が繰り返されているだけだった。

。 。 。

それでもまだ、彼らの子がいるんだ。

魔法学校で一斉にお腹を大きくさせていく子もいる。

陣痛に耐えながら修行を頑張っている子もいる。

精力的に活動し続いているしづなみちゃんも居る。

それにもまだ、しづなみちゃんと子供を作っていないんだ。

そつ思い、ボクさんは気合を入れなおす。

ちゅうと鬱になつたけど、まだまだこれからだ。

明日は修行の終了日。

残るも残らないもボクちん次第だから、ボクちんは残らない方を選択する。

正確には分身に残らせて、本体のボクちんだけ麻帆良を離れる。

魔法学校の先生や生徒、それにアーニャなどの同期とネカネお姉ちゃん。

もつひとつ6ヶ月だから、お腹が大きくなっているはずである。

4ヵ月後、どのような娘が生まれるのだろうか。

ボクさんは自分の娘と色々する未来を思い浮かべながら、そのまま
麻帆良の地を去った。

「そういや、最初は千鶴ちゃんを永遠の妻にするつもりだったのに
…。なんかどうでも良くなっていたなあ…」

そんな思いを、口に出しながら。

100年後

あれから100年間。

何度も鬱になりながらも、ずっと続けてきた31億人ハーレム生活。

ある時はしづなちゃんと2人で過ごし…。

ある時は魔法世界の王宮で過ごし…。

ある時はメリディアナ魔法学校で過ごし…。

ある時は麻帆良学園で過ごし…。

ある時は中国、ある時はアメリカ、ある時はオーストラリア、ある時はアフリカ…。

いざれの場所でも、ボクさんは今まで通りだった。

一定の範囲や条件を決め、その範囲や条件に当てはまる全ての女性をターゲットに設定。

何かをすれば”都合の良い強制認識”が自動的に発動し、ボクちゃん以外にも色んな人が動き出す。

するとボクさんに都合の良い事ばかりが起きて、間もなくミッションコンプリートだ。

それはたとえ自分の子供であれども変わらなかつた。

相手がしづなちゃんであることを、である。

.....。

しづなちゃんはボクちゃんと一緒に永遠の命を得た時、すぐ喜んでくれた。

でもその頃から、意欲が少しずつなくなつていったんだ。

そして100年経った今日。

「死なせてほしいの」

そう頼まれて、しづなちゃんを消した。

意外と悲しいという気持ちがわかない。

まあ、それはそうか。

なぜなら、ボクちゃんも今や虚しくて仕方がないくて…。

しづなぢゃんと、同じ状態だったのだから。

。。。

その時、ふと……。

友達といつも下僕が勧めてくれた、非18禁の一次創作を思い出す。

その物語は、ボクちゃんの今までできる力を得た少年の物語だ。

それにも関わらず、少年は馬鹿で間抜けで、あまり力を使っていかつた。

だから、ボクちゃんには気に入らないことこの上無かつたんだ。

その気持ちは、ボクちゃんが何でも出来る力を手に入れた後は一層大きくなつていった。

そして少年の行動に反発するように、エロ方面で力を使いまくつたんだ。

でも……。

今のボクさんは、その気に入らなかつた一次小説が気になつて仕方がない。

その中の一文が、頭から離れない。

”怠情極まる氣楽な酒池肉林生活…でしたつけ？ それを実現してしまひと…“

”酔つてばかりでボーッとしかできない毎日だわさ“

”麻薬中毒みたいですね“

”そんな人生、幸せじゃねえだろ“

まさしくその通りだつた。

やり始めた頃は楽しくて仕方がなかつたけど、それはあくまで一時の快樂。

それは20年も続いたが、麻帆良女子中学校で修行を終えた頃には限界が見えていたんだ。

それでもこの生活を止めることができずに、全てがボクちんに都合の良い環境で、ずるずると……。

それが虚しくなつて一度は”ボクちんに都合の良い強制認識”を外そうと思った。

でも外したら、31億人の女性が怒り狂つてボクちんを責めるかもしれない。

ボクちんが魔法世界で権力者側だった女性にしたよつこ、家畜にされるかもしれない。

長谷川千雨ちゃんや葉加瀬聰美ちゃんを雌奴隸にした時のよつこ、
強制証文で雁字搦めにされるかもしれない。

そつ思つと、怖くて外せなかつた。

いつの間にかボクちんは、全てが都合の良い環境でないと生きられなくなつていたんだ。

そして同じシーンの続きが頭に浮かぶ。

”アナタの場合、自分でも気付かずに自分を不幸にしてしまつ可能な性があった”

”憶えておいて。過ぎた薬は毒となる。それは能力も同じ”

本当に、その通りだ。

ボクさんは何でもできる能力で永遠の命を手に入れた。

それは人なら誰もが欲しがる究極の『豪華だけど…』。

長く生きた今、ボクさんの心には空虚しかなかつた。

ボクさんは世界中の男を殺しつくして31億人のハーレムを手に入れた。

それは男なら誰もが憧れる究極のハーレムだけだ。

今も肌を重ねている彼女たちでは、もうボクさんの心を満たせない。

ボクさんは『何でもできる力』という過ぎた薬を使いまくって……。

自分でも気付かずに、自分を不幸にしていただけだったんだ。

昔から、幸せとか不幸とか、いつも良くていたけれど……。

今のボクさんは、虚しさを解消する幸せを、心を満たす幸せを、切実に求めていた。

でもそれは、全てがボクさんに都合の良い今の環境を変えないと、永遠に得られないものだ。

そして環境を変えられないから、ボクさんの虚しさは永遠に続く。

それに気付いたボクさんは、もう死にたいと思つた。

そして、じゅなちゃんと同じように自分を消したんだ。

。 。 。

2103年7月30日。

一時期ネギ・スプリングフィールドを名乗っていた通称”ボクちん”が、140年の人生に幕を閉じる。

その瞬間、現実世界、魔法世界に存在していた全ての男性がいきなり消滅してしまった。

その後、残された女性たちは、生き残りの男性を探しながら真相の究明を始める。

そして調査を勧める中で、”ボクちん”の手記が発見され、真相が

明らかになる。

しかし、それは人類の滅亡を約束するものでしかなかつた。

その後遺伝子工学の研究が盛んになり、女同士で子供を作る方法などが研究されるも、効果が無く…。

猿など他の動物との子供を作る研究も、上手くいかなくて…。

2124年、魔法世界が崩壊。

2208年、人間種が絶滅。

2578年、亜人種が絶滅。

人の居ない世界。

それが再び、始まつたのだった。

最強になつたゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話 完。

地球上にとつては HAPPY END?

「」まで読んでくれて、ありがとうございます。

クズヒロ
今作の本編は終わりますが、気が向いたら番外編を投稿するかもしれません。

ですが、まずは「」まで読んで下せりたあなたに最終話の裏話を公開します。

裏話とかどうでも良いという方は、飛ばしても構いません。

まずは終わり方にについて。

純粹なハッピーエンドを期待していた方には、本当に申し訳なく思っています。

そもそも今作は『劉奏のアンチ』＝「ボクちん」を否定する物語でした。

（劉奏とは作者の処女作『早すぎる転生物語』の主人公のことです）

そのため、ボクちんが不幸な結末を迎えることは、どうしても避けられなかつたのです。

ボクちゃんの人生は劉奏が体験したかもしない不幸な人生。

そんな位置付けだったのですから。

それでも何とかして純粋なバッドエンジニアしたくないと思い、最後に視点を変更。

そして『地球にとつてはそれで良いのでは?』といつ問い合わせを込めて締め括りました。

環境保護の活動も、所詮は人間にとつて快い環境を保護する活動ですからね。

それはとても良いことです。

良いことなのですが……。

何だかんだ言つても、地球にとつて人間は病原菌のようなもの。

その事実だけは否定できないと、作者は思うのです。

あと、今回の話で100年も飛んでビックリした方が多いかもしれませんが……。

飛ばしたのには理由があります。

それは今回の話でも書いたよつて、100年間の”ボクちん”が暗いことです。

しかもただ暗いだけではあります。

虚しい気分を発散するためにH口に走り、その後でまた虚しくなり、それを誤魔化すためにまたH口に走る。

それで回数を追いつけるとこ~~繰々~~（つつつつ）とした雰囲気が増していく…。

つまり話数が増えるごとに暗さが増していく、ここがことです。

正直、そんな悪循環を長々と見せられたのも面白くないと思いません。

それに、書いていても面白くありません。

このよつな理由から、麻帆良後の100年を飛ばしました。

改めてH口まで読んで下さったあなたに感謝を申し上げます。

本当に、ありがとうございました。

なお、同じ作者の完結作品として下記の3作がありますので、気が向いたらぜひご覧ください。

?処女作『早よざる転生物語』（<http://nocode.syosetu.com/n9540s/>）

間抜け・変態・臆病者と3拍子揃つた少年が、恋姫無双とAngel Beats!の世界に転生する物語です。

クズエロ
今作を作るきっかけになつた物語で、恋姫無双の世界では戦争 자체を阻止してしまいます。

?短編『一晩で終わる聖杯戦争』（<http://nocode.syosetu.com/n3805t/>）

好きな能力を3つ貰つただけの一般人が、Fate/stay nightの世界にサーヴァントとして召喚される物語です。

しかしこの一般人、たった一晩で聖杯戦争を終わらせてしまいました。

?短編『世界一短い物語』（<http://ncode.syosetu.com/n7660t/>）

この作品は題名がそのままテーマになつている完全なネタ作品です。

本当にくだらないことこの上ないですが、それでも良ければどうぞ。

【Tips】3種類の水着

ネギ先生になつたボクさんが、初めて魔法学の授業をしたときのことを、憶えているかな？

あの時ボクさんは刀子先生に”あぶない水着”を着せて、のどかちやんに”きわどい水着”を渡そうとしたよね。

ボクさんはこの2つの水着と”いけない水着”の計3種類を用意して貰つたんだけど……。

この3つの水着が、どんな水着か気にならない？

気になるよね？

つていうか、気にならないのなら飛ばしてくれていよいよ。

今回はボクさんが用意した3つの水着の紹介をする。

【1着目：あぶない水着】

まず紹介するのは、ボクちゃんが刀子先生に着せてあげた、あぶない水着。

もちろん着せるときにセクハラしまくっていただけだね。

そのことは置いといて、今はあぶない水着の紹介である。

形状は、簡単に言えば潜水用の水着。

手は手首まで、足は足首まで、首はのど下まで覆っている、あの水着である。

と、これだけを聞くとどうが“あぶない水着”のか疑問に思つかもしれないが、説明はここで終わらない。

何と、最も隠すべき大事な3ヶ所だけが、綺麗に切り抜かれているのである。

加えて肩と肘の部分に仕掛けがあつて、どうやっても切り抜かれた部分を手で隠せないようになつてている。

具体的に言えば、肩の部分は前後に、肘の部分は少しも曲げられないようになつてているのである。

だから本編では描かれなかつたけど刀子先生に“あぶない水着”を着せた時には……。

「じ、自分で着れますか?」

「ダメです」

「そ、そんな……あんつ、ふああつ」

という感じで、相手が抵抗できないのを良ことに大事な3ヶ所を
弄りながら説明していたんだ。

だから武装解除の説明を始めた時にも……

「」^{エクセルマティオ}のよつて元^{エクセルマティオ}武装解除は……

「ひーあつー、そ、そんなと」^{エクセルマティオ}摘んでは、ひやうー。」

「……服を着せているだけなのに変な声を出さないで下せこ」

「そんな無茶つ、はああああああんつ」

「仕方あつませんね……」

「つ、…………つ、……つ、つ、～～～～つ……」

刀子先生の声が大きすぎて説明の邪魔だから、説明中に口^{エクセルマティオ}を出せ
なくなるように念じた。

……と、そんな事があつたんだ。

それで気を取り直したボクちんが武装解除の説明を再開。

「うして……

「武装解除は先ほど刀子先生にしたように、相手の獲物を吹き飛ばして自分が攻撃されないようにする魔法です」

「そつかあ……」

「掛けたもん勝ちだね」

「なんか面白そう」

……と言つ、本編の流れになつたわけである。

つとど、いけないいけない。

話が脱線しまくったけど、ボクちんが用意した”あぶない水着”がどんなものかわかつたかな？

”あぶない水着”は、競泳水着の3ヶ所が切り抜かれて、その部分を手で隠せないよつにした水着である。

【2着目・きわどい水着】

これは富崎のどかちゃんが欲しいと言った水着だね。

形状はいわゆるV字水着。

股から二又に分かれた生地が、直接肩に通される水着である。

その生地の幅を短くして紐のよつにして、大事な3ヶ所だけ、ギリギリ隠れるようにした水着…。

それこそが、ボクちんが用意した”きわどい水着”である。

しかしこれだけでは上半身の2ヶ所の位置が水着のラインからずれてしまい、上手く隠すことができない。

そのため上半身の2ヶ所を隠す部分の裏には、洗濯ばさみのよつに強い力で挟む仕掛けが用意されている。

挟む仕掛けは目立たないよつに薄く作られているから、外から見ただけではわからない。

これで、ちゃんと大事な3ヶ所を隠せるよつになるわけだ。

あ、大事なことを言い忘れていた。

この”きわどい水着”だけは、必ず本人よりも2サイズ小さいものが渡される。

その結果、どんなことが起きるのか……

……それは「想像にお任せするよ。

”きわどい水着”は上半身の2ヶ所を隠すための仕掛けがある、2サイズ小さいV字ヒモ水着である。

【3着目：いけない水着】

この水着は、上も下も大事な部分はしっかり覆っている。

しかも鍵まで付いていて、容易に取り外せないよう出来ているんだ。

まるで胸当て鎧と真操帶だが、その目的は身につけた女性の純潔を守ることではない。

むしろ逆で、水着の裏には様々な仕掛けが用意されていた。

具体的にどんな仕掛けが盛り込まれているかは言えないんだけど……。

少なくとも、入れる・震える・滲み出る・搾り出す・遠隔操作という5つの要素はある、とだけ言っておこう。

正直ヤバすぎて、具体的に仕掛けの内容を書くことができないのだ。

何せ形状を見た途端、皆が揃つて敬遠した水着だからね。

まだ初めてを迎えていない娘たちは特に嫌がっていたね。

その嫌がりよつは、朝倉和美ちゃんと柿崎美砂ちゃんが協力しても、友達に身に付けさせられなかつたほどである。

それでボクちゃんが2人に”いけない水着”をセットしてあげたんだけど……。

まさか2人とも経験が無かつたなんて思わなかつたんだ。

もつたいない事をしたものである。

つと、いけないいけない。

また話が脱線しまくったから、話を元に戻すとして……。

何にしても、おそらく考えつる仕掛けをこれでもかと詰め込んだり
”いけない水着”になりそうである。

以上、3つの水着の紹介でした。

のどかちゃんが”きわどい水着”を選んだ理由、わかつたでしょ？

ぐふふつ、勿論のじかちゃんには全部着てもらつたけどね。

特に”いけない水着”を1週間ずっと身に付けさせた時といつたら、
もつ……。

つと、いけないいけない。

それはまた、別のお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3362t/>

最強になったゴミクズがエロ方面で好き勝手しまくる話

2011年6月16日05時13分発行